

ようにして結びつきえたか」という「一つの謎とも見える」(165頁)疑問である。これにたいして、「一見奇異には見えても、まさしく、カルヴィニズムの信仰による個人の内面的孤立化の圧力の下で、キリスト教の『隣人愛』が帯びるほかなかった独自の色調」(同上)として、有名な「隣人愛の非人間性」(Unpersönlichkeit der Nächstenliebe)という概念をたてて、答えようとするのである。ここで展開される議論はきわめてユニークな、興味深いものであるが、カルヴィニズムの予定説の心理的帰結を内面的孤立化と考えるウェーバーの分析には根本的疑問を懐かざるを得ない。たしかに予定説あるいはその前提である神観念は、個々人を神の前に責任を負う自立した存在とするものである。しかしそれは内面的孤立化というものではない。さらに、予定説は根本的に恵みの選びの教説であって、選びは選ばれたものを結びつけて、選びの民 (populus electus) を形成する原理である。とすれば、カルヴィニズムが組織形成にすぐれていたことは何ら不思議ではない。ただその組織あるいは社会の中身、性格についてはウェーバーの分析的射たところが多くあると思うが、「隣人愛の非人間性」を組織形成の原理とする議論には無理があるように思われる。

## 六

ウェーバーはさらに、予定説の心理的帰結と結びついたその実践的帰結の問題に論を進めていくが、それがよく知られた、予定説と禁欲的職業労働の関係の問題である。ウェーバーは「地上の生活のあらゆる利害関心よりも来世の方が重要であるばかりか、さまざまな点で一層確実とさえ考えられていた」宗教改革の時代に、予定説というきびしい教説を人々がどのように受け取ったかという問いをたてて、次のように言っている。

「かならずや信徒の一人ひとり胸には、私はいったい選ばれているのか、私はどうしたらこの選びの確信がえられるのか、というような疑問が

すぐさま生じてきて、他の一切の利害関心を背後に押しやってしまったにちがいない。カルヴァン自身にとっては、このことは少しも問題とならなかった。……ところが、彼の後継者たち……とりわけ日常生活のうちにある平信徒の広い層のばあいには、……『救いの確信』がどうしてもこの上もなく重要なことになるほかはなく、……『選ばれた者』に属しているか否かを知ることのできる確かな標識があるかどうかという問題が、無くてはすまされぬことになっていった」(172～73頁)<sup>15)</sup>。

この「救いの確信」を求める一般信徒たちの要求を禁欲的職業労働と関連づけ、そこから資本主義の精神の成立へと展開していくウェーバーの議論をいま扱う余裕はない。ただその出発点になる予定説の与えた心理的影響の問題について一度ふれておきたい。

ウェーバーは、上述のような「予定説から生じてくる内心の苦悶」(178頁)に対処して「自己確信を獲得するための最もすぐれた方法として絶え間ない職業労働が命じられた」(179頁)。つまり「職業労働がいわば宗教的不安の解消のための適切な手段とみなされえた」(181頁)と言う。先に、予定説のもたらす心理的結果として内面的孤立化が言われたが、ここではさらに、宗教的不安、内心の苦悶が語られる。しかしこれは「歴史的事実としての記述ではなく、推論であり、心理分析である」<sup>16)</sup>。別の推論も心理分析も可能である。そもそも「救いの確信」はあらゆる宗教の根本問題であって、ウェーバーもこう言っている。「民衆の広い層をとらえた宗教運動はすべて『どうすれば自分の救いに確信がもてるか』という問いから出発している。そうした問いは、このばあいだけでなく、およそ宗教史上において、……中心的な役割を果たした。そもそもそれ以外のことがありえたのだろうか」(182頁)。したがって、ウェーバーの推定した予定説から生じる疑問は、「救いの確信」を求めるすべての人たちに共通の要求がとった一つの形であって、問いそのものが予定説からでるわ

15) 「救いの確信」の問題については、次の拙論参照。村川満「カルヴァンと『ウェストミンスター信仰告白』の信仰論(Ⅱ)：救いの確信について——R. T. ケンドールの所説をめぐって——」、『関西学院大学社会学部紀要』58号、1989年、15～38頁。

16) 安藤英治、前掲書、297頁。